に向き合って日々生活している姿を見ると、救われる思いだ。
環境カウンセラーとして避難所を回り、避難している方々のメンタルケアにも取り組んだ。ビッグパレットでは荒れている子どもがいて、他のカウンセラー達が手を焼いていた。私は絶対にこの子と対峙すると心に決め対応した。最後には母親の手を引いて、お母さんに竹とんぼをあげたいからひとつ欲しいと、私のもとへやってきてくれた。

震災を振り返って

あまりにも大きすぎて、これから先どれくらいの時間で私たち人間はもとより、失われた地域や自然が回復するのかがわからない。現在、福島県の環境カウンセラー協会の会長として福島県総合計画審議会の委員に着任し、総合計画の見直しに関わっている。意見は言えるが、自分の気持ちとかい離していてもどかしい部分もある。現場に近い私の意見に対し総合計画は「こうあるべき」という中で折り合いをつけていかなければならない。福島県の危機的な状況を考えると、私がこれまで

冊子「キッズフォトジャーナル」に教え子が掲載された

培ってきたことを意見として出し、施策の中に活かされていくようにする責務もある。本当に福島が再生するかどうかわからない状況の中、新たな総合計画が福島再生の大きな力になるものであれば、私の役割は果たせると思う。

任意団体 キーワードは「お互い様」

相馬市

小幡 広宣 相馬遊楽応援団

取材日 2012.09.11

福島県相馬市にある同級生８人で立ち上げた市民ボランティア団体「相馬遊楽応援団」。震災後は瓦礫の撤去をはじめ、仮設住宅への緑のカーテンの設置、仕事を失った方々のための支援としてアクリルたわしの製造・販売の支援など精力的に活動している。

3月11日　14時46分

建設関係の会社を経営している。3月は建設業界が忙しい時期だ。普段は現場回り、営業が主な仕事であるが当日は現場に出ていて、トラックを運転していたため地震だとすぐには分からなかった。周囲の人の話を聞くと5分ぐらい続いたということだが、1分ぐらいにしか感じなかった。後ろから追突されたのかなという感覚で、赤信号で停車してやっと地震だと気づいた。現場が気になったが電話がつながらなかったため、付近の現場を2カ所回り、元請会社の指示に従うようにと声をかけた。その後、原釜にある自宅へ戻り、大した被害が無かったことと、家族全員の無事を確認した。

ひとまず安心したが、南相馬市にある現場と連絡がつかなかったため、心配になり現場へ向かうことにした。トラックから乗り換えた自家用車のテレビでは、3mの津波警報を伝えていた。3mであれば堤防は超えないし大丈夫だろうと思っていたが、途中で10mの警報に切り替わった。相馬の堤防は確か7m前後だから、明らかに超えてしまう高さだ。南相馬へ行くにしても道路の状況がどうなっているのかわからない、行ったところですでに避難しているかもしれない。家族のことも心配になり南相馬市の現場へ向かうことをやめ自宅へ戻ることを決めた。
戻ると、妻子と義母が避難せず家にいた。義父は地区の区長をしていたこともあり消防と一緒に避難指示を出すため出かけていた。「10mの津波警

報が出たから避難するぞ！」と言ったが、妻も義母も本気にせず、家は3階建てだから津波が来たら2階か3階に逃げれば大丈夫と呑気に構えていた。私は津波が確実に来ると思い、とにかく避難しようと急かした。義母は預かっている町内会費を心配してそれだけでも持っていきたいと言っていたが、自分は危険を感じていたため町内会費と命とどちらが大切かを説得し、急いで避難指定所になっている高台の公民館へ向かった。記憶が定かではないが、着いて5分か10分後には人が乗った船や黒い煙を上げながら津波に流される家々を高台から見ることとなった。
ホームページにもその写真を載せているが、自宅は鉄骨で波が当たる面積が少なかったこと、地形や他の建造物が緩衝してくれたことなど、さまざまな要因があってその形をとどめた。翌日自宅へ行ってみると、3階の部屋で腰の高さほどの位置に津波の跡が残っていた。
当日はそのまま高台の公民館で過ごし、早朝、中学校の体育館の避難所に移動し、そこで2カ月間生活した。
地震当日の深夜、市役所へ何をしたらいいかを聞きに行くと重機をあるだけ出してほしいと要請され、翌朝から約1週間は道路を通れるようにするための瓦礫の撤去にあたった。

福島第一原子力発電所の水素爆発

避難所の中でも家族ごとに避難するかしないかが話し合われていた。うちもどうするか話していたが、直ちに健康に害はないという総理大臣の話を聞いて一度とどまった。周囲は続々と避難していった。従業員も15人のうち11人が避難した。私も避難を迷ったが、いろいろ考えた結果、3月18日に妻と子どもだけ私の実家の秋田へ避難させた。だが、慣れない生活の中で余震が続き、大きな震災があった直後に離れて生活することに不安を感じたのか、妻も子どもも戻りたいと言ってきた。また同じような地震が来て、何百kmも離れたところで妻や子どもに何かあっては心配だ。放射能の被害がどの程度か分からないが、いつ何が起こるかも分からない。ここで暮らす以上、原発のリスクを負うことは覚悟しなければいけないが、一緒にいられるのならできるだけ一緒に暮らせた方が良いと腹を据えて、妻子を呼び戻した。5月の中旬まで避難所で生活し、現在は仮設住宅で生活している。

相馬遊楽応援団

相馬遊楽応援団は平成20年に相馬をもっと元気にしたいと、同級生8人で立ち上げたボランティア団体だ。相馬の観光地をきれいにすることぐらいならできる。最初は市内でのゴミ拾いを始め、海上保安庁や小名浜港湾事務所などの協力を得て相馬の海をPRするイベントなども実施した。

震災後は震災復興を目的に熊本のNPO法人青年協議会の協力を得て、代表の上村さんにアドバイスをいただきながら県外からのボランティアさんに加わっていただき活動に取り組んだ。
最初に行なったのが、熊本からの支援物資の配給だ。1軒目のスーパーマーケットが開くまで、一軒一軒に物資を届けた。次に避難所の体育館にいる人たちの健康が心配だし、お金も必要だろうと考え、瓦礫の撤去作業に避難所の方たちにも加わっていただき、対価を支払うことにした。原資は東京での募金活動で得て、作業に必要な道具も購入した。避難に伴う犬や猫の問題が出てきたため、犬の避難所を設置することにした。土地を確保し、保健所と調整し、施設を建設、運営にあたった。屋外に出られない子どもたちのために、東京で募金活動をしながら社会勉強をしてもらう活動もした。0円サマーキャンプや仮設住宅への緑のカーテンの設置など、必要と思えばとにかくやってみた。
これまでの常識では不可能と考えていたことをことごとく成功させることができたのは、ひとえに周囲の支援があってのことだと思う。
緑のカーテンは、当初の計算で400万円が必要だった。募金でその金額が集まるという保証はない。だが、まずは「やる」と決めないうちは事が進まないと言われた。犬の避難所もしかり。白紙の状態から土地の確保、資材の調達、保健所との打ち合わせ、すべて1週間で準備した。無理だと思っていたことも、やってみれば案外できるということを上村さんに教えてもらった。それが正しいかどうかはわからない。大分無理なこともやったし、結果オーライだっただけであって、一歩間違えば危険なこともたくさんあったと思う。でも躊躇するのではなく、まずアクションを起こすこ

とが大切だということを半年間で学んだ。同時に、いつまでも外からの支援に頼るばかりでいてはいけないと思うようになった。震災から半年が経過し、上村さんも相馬を離れることとなりここからは相馬のために自分たちだけでやってみようと心に決めた。

市民にできることを考える

やる気のある人をサポートしていくのがボランティアだし、それが本当の支援だ。仮設住宅に住み仕事を失った女性達を募ってアクリルたわしを作って売ることにした。2011年10月ぐらいから構想をあたため、始めたのは2012年3月。全国から沢山の方々の応援を頂き9月末までに8,000個を販売した。作り手は10名～15名程度。1個300円で販売し、100円が作り手さんの収入になる。原材料などのコストを引いた残りは、新商品開発や新企画のための費用などに充てる予定だ。そのほか、食品の放射性物質の測定を民間団体に依頼して、数値をブログで公開している。市でも検査は行なっているが、行政に任せきり、依存することは危険なことと考え市民にもできることはやるという気持ちが活動のベースになっている。これまで行政にすべてを任せ依存してきたことが今回の大震災後の混乱を拡大させたのだと思っている。震災後の行政の対応を非難する声は多いが、市民にも責任がある。あの当時の行政職員は、目の下にクマを作って対応していた。それでも追い付かない現状があった。我々市民は行政に与えてもらうのが当然と思っていたが、それが間違いであったことに気づかなくてはいけないと思っている。原発問題や政治問題に対して、日本国民はあまりにも専門家に任せきりで、依存しすぎている。依存するということは、ある意味無関心であるともいえる。

食品検査は、無関心をやめなければという意味もある。市が検査をしているから良い、国が大丈夫と言っているから大丈夫ではなく、万が一行政が機能しなかった時、我々市民にも何かしらの行動ができる体制づくりをしておきたい。最初は風評被害の助長だと非難されるかと思っていたが、今のところはない。持論をブログに書いているおかげもあるかもしれない。危険だとも言えないし安全だとも言えない、それを無責任だという人がいるかもしれないが、自分の子どもに食べさせるならやっぱり放射能は無い方が良い。私は5ベクレルくらいだったら食べる、でも自分の子どもに5ベクレル大丈夫だよと食べさせるか？検出された食品と未検出の食品があったら、絶対無い方を食べさせると思う。ブログにはそんな持論を公表している。もう一つ、市政勉強会をしようと、相馬市の市議会議員の方たちを招いて意見交換を行なっている。無関心を続けるのではなく、自分達が暮らす街の政治や復興に興味を持ってもらうためだ。

編み手の皆さん

活動を「やらせていただいている」

犬の避難所の運営費に、個人の方から匿名で100万円の寄付があった。あまりの大金に驚き、どうにかお礼をしたいと銀行に追跡をお願いしたが、名乗るつもりはない、とにかく応援しているとだけ伝えてほしいとの伝言だけが返ってきた。

お金だけではなく、そんなことまでしてくれるのかと思う出来事もあったし、ボランティア活動に心から感謝されると、こちらも嬉しくなる。それがモチベーションであり、やっていてよかったと思う瞬間だ。

上村さんからは、「やってあげている」のではなく「やらせていただいている」のだと、それを忘れてはいけないと何度も言われた。やってあげていると思うから見返りを求めるし、ありがとうと言われないことに不満を感じたりする。やらせていただいているのだから、ありがとうと言われなくて当然だ。それはまだ呑み込めていないが、そう思うように心がけている。

震災を振り返って

信仰心はないし神や霊の存在を信じていないが、1年半経過した今、大震災は神様が人間に対して送ったひとつのメッセージだと思っている。我々が気づかなくてはいけないのは、依存や無関心でいてはいけないこと、お互い様という心を思い出すようにと言われているのだと思う。

アクリルたわしの趣旨文には「お互い様の心を広めたい」と書いた。どこかに呼ばれていった時も必ず「お互い様だよ、支援じゃないよ」と言って

いる。一方的に何かをしてもらうつもりはなく、支援してもらったら必ず何かの形で返したいと思っている。リクエストがあれば震災の経験を語るし、相馬に来たいという人がいれば仕事を休んででも、案内する。一日つぶしてでもお互い様という心の大切さを伝えたいと思っている。
宮城県のスコップ団の団長さんとお会いする機会があった。団長さんも「復旧とか復興ではないんだ。お互い様って言う気持ちなんだよ」と、自分がずっと思っていた事と同じことを仰っていた。これから日本が良い方へ向いていくためのキーワードは「お互い様」だと思っている。
今回の大震災では多くの命が奪われ、その方々や家族の心情を察すると軽々しいことは言えないが、生き残った我々はこの体験から気づいたことを生かしていかなければならない。私にとってその答えが「お互い様」である。この気持ちを持つことを実践し発信していく事が福島・東北の復興に繋がり、亡くなった方々へのせめてもの報いだと思っている。

犬の避難所

NPO

相馬市

震災後の思い、志が未来に伝わるものに

3.11 あの時
P68 Report. 31 の続きです

新妻 香織 NPO 法人フー太郎の森基金

取材日 2012.09.14

1998年、アフリカの緑化と水源開発を行なう「NPO法人フー太郎の森基金」を創設、代表。国内においては2000年松川浦の環境保護団体「はぜっ子倶楽部」創設、代表。東日本大震災後は、「（社）ふくしま市民発電」「（社）東北お遍路プロジェクト」を創設、ともに理事長。また相馬市市議会議員になり、津波と原発事故の被災地復興に取り組む。

現在までの活動

津波で故郷も実家も流されてしまった。事務所を置いている自宅は2軒前で津波が止まってくれ、たまたま残った。周りの家は破壊され家族を失った方もいて、あまりの惨状に涙も出なかった。
そのような状況の時には、私は落ち込む前に逆に何かやらなければとアドレナリンが出る性格のようだ。震災以降、猛烈に走ってきた。しかし最近になって震災の映像を見ながら話している時、声が詰まって話ができなくなることがある。今までは緊張していたのだなということがよく分かった。
私が属する「フー太郎の森基金」と「はぜっ子倶楽部」の相馬市のメンバーを中心に、鎌倉からやってくる青年ら、県外の会員、ボランティアセンターから派遣されるボランティアの皆さんらが加わって、様々な支援活動を行なった。まず緊急支援として、炊き出しや瓦礫の撤去を行なった。次は避難所から仮設住宅へ移る人たちの生活支援をする

ため、全国から日用品を集めて配った。また在宅で被災した人たちが何の支援も受けていなかったので、全戸アンケートを取り、必要なものを早稲田のマッチングサイトなどから支援を受け届けた。
この辺りではスーパーマーケットが2軒流されて